

## 上野村における大型菌類の調査

群馬県立自然史博物館 篠原克実

### I. 調査の目的

上野村の菌類相はこれまで報告されていない。本調査では菌界の担子菌類と子囊菌類に属し、肉眼で十分に識別可能な大きさの子実体を形成する種類（大型菌類）を調査対象とし、上野村の菌類相の基礎的な情報を収集することを目的とした。

### II. 調査地の概要

上野村は険しい山野が総面積の90%以上を占める。本調査では登山道および登山道周辺を調査した（図1）。2011年は4回の調査を5地点（a, b, c, d, e）、2012年は7回の調査を5地点（d, e, f, g, h）2013年は9回の調査を5地点（d, e, f, g, i）で行った。

- a: 御巢鷹山旧登山道
- b: 御荷鉾スーパー林道
- c: 天狗山登山道
- d: まほーばの森
- e: 北沢溪谷登山道
- f: 笠丸山登山道
- g: 天丸山登山道・旧馬道
- h: 諏訪山登山道
- i: 矢弓沢林道

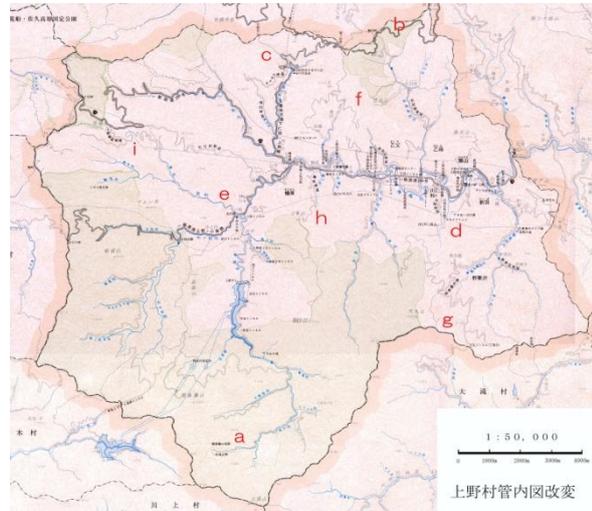


図1 調査地

### III. 調査方法

群馬県林業試験場きこの係の協力を得て、常時2名以上（最大で4名）の体制で行った。登山道沿いが中心ではあるが、比較的緩斜面の林内は細かく歩いて調査し、子実体の確認を行った。子実体の同定は、現地にて行うことを主とし、顕微鏡的観察が必要な子実体については博物館にて検鏡し同定作業を行った。

### IV. 調査結果

本調査では、66科224種の大型菌類を採集した。224種のうち最も多く採集されたのはサクラタケの16個体で、続いてホコリタケの12個体だった。また、ドクツルタケやアラゲキクラゲ、イタチタケ、ニカワハリタケ、ホウロクタケなどもそれぞれ9個体と多く採集した。

図2は採集した224種を科ごとにグラフし表した。タマチョレイタケ科が18種と最も多く、モエギタケ科が15種、ハラタケ科14種、キシメジ科が13種、イグチ科が12種で、この5科で全体のおよそ32%を占めた。タマチョレイタケ科の主な種は、コフキササルノコシカケなどで、これらは子実体が硬質で胞子を放出した後も子実体は原型をとどめているため最も多く採集できた。タマチョレイタケ科の中でも、発生が比較的まれなタマチョレイタケを採集した。タマチョレイタケの子実体は、地下に形成された菌

核から生じる地上生と倒木などの腐朽材から生じる材上生の2つの異なる生態をもつ。今回の調査では、2012年の9月に地点h（諏訪山登山道）で材上生の子実体を採集した。また、2013年の10月3日に地点e（北沢溪谷登山道）で地上生を、10月24日に地点f（笠丸山登山道）で材上生を採集し、発生状況の異なるタマチョレイタケを確認した。

モエギタケ科の15種のうち、ニガクリタケが最も多く、続いてツチナメコの発生がみられた。いずれも腐生菌で調査した9地点のうち5地点での発生がみられた。

ハラタケ科の14種のうち、ホコリタケが最も多く、他にはオニタケ、シロオオハラタケ、ザラエノハラタケなどだった。ハラタケ科の大型菌類の多くは地上、腐植上、材上と様々な基質に発生する腐朽菌という性質から、9地点の調査地のうち7地点と多くの調査地点で子実体の発生を確認した。中でもd地点（まほ一ぱの森）の林床は緩斜面の腐植層が厚く、ハラタケ科の子実体の発生が多くみられた。

キシメジ科の13種のうち、最も多いものでもハイイロキシメジの3個体だった。キシメジ科に属する種は多く、採集個体数は少ないが、多くの種の発生がみられた。

イグチ科の12種のうち、ヤマドリタケモドキが多く、他にキアシアミイグチ、ニガイグチなどだった。イグチ科の多くは樹木との共生関係にあり、上野村の94%が森林ということからも比較的多くの種の発生がみられた。

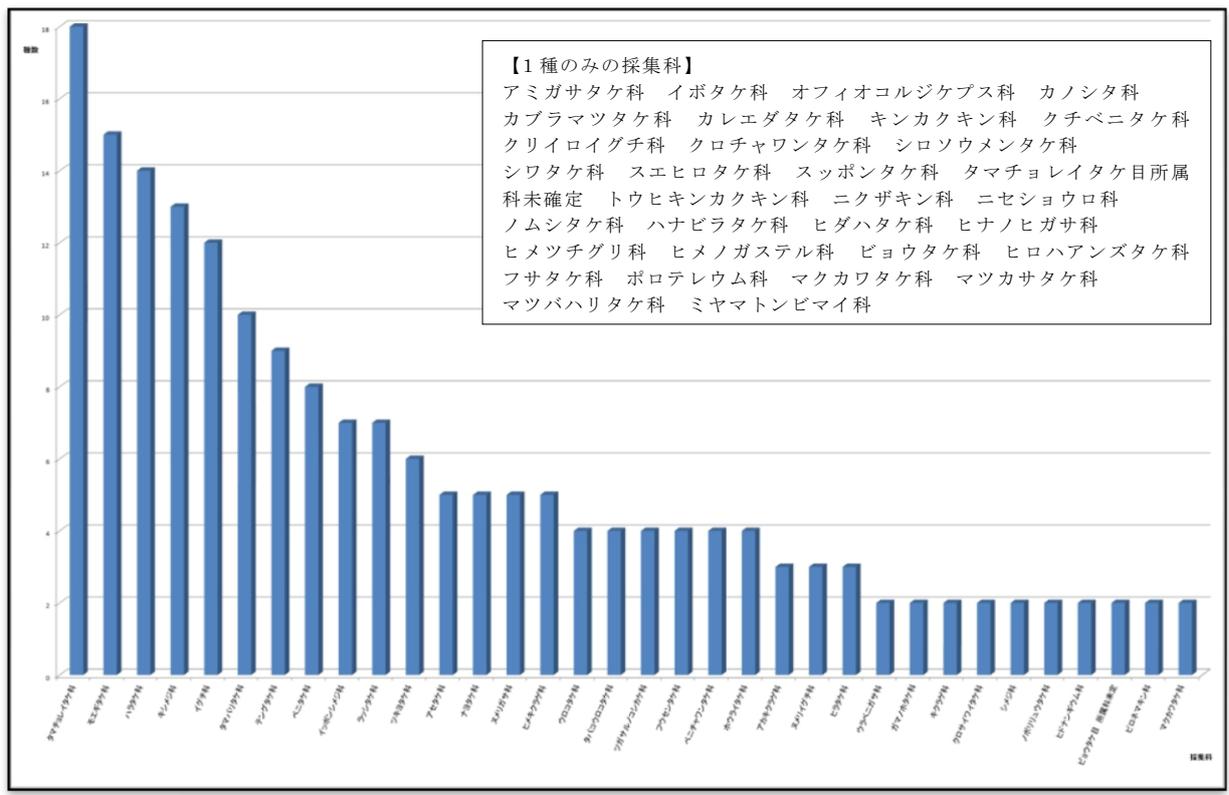


図2 採集した科ごとの種数  
 (2種以上の採集科はグラフで表示, 1種のみ採集科は口内に表記)

キーワード：菌類・キノコ